

鼠径ヘルニア メッシュ手術

脚の付け根辺りの鼠径部が膨らむ鼠径ヘルニア(脱腸)。腸が筋膜(筋肉)のすき間から皮膚の下にはみ出すのが原因で、網目状の合成繊維のメッシュですき間をふさぐ手術が近年定着している。岡山第一病院(岡山市中区高屋)の江田泉院長は「従来の手術に比べ再発が減り、術後の痛みも少ない」と効果を語り、日帰り手術も手掛けている。



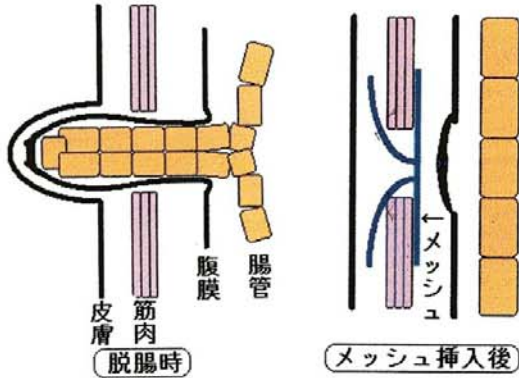
岡山第一病院
江田 泉 院長

(中浜隆宏)

鼠径ヘルニアは、年を重ねることなどで鼠径部の筋膜が弱くなり起る。子どもの病気と思われがちだが、中高年に多く、患者の8割以上は男性。女性より力仕事をすることが多く、強い腹圧がかかるのが一因という。膨らみは当初、ピンポン球ほどで柔らかく、指で押すと引っ込むが、次第に大きくなり、違和感や軽い痛みを感じることもある。「怖いのは、はみ出した腸が出口部分で締め付けられ戻らなくなる嵌頓。まれに起こり、激しい痛みがある。腸閉塞や

痛みと再発が減少

鼠径ヘルニアの状態(左)とダイレクトクーゲル法の手術後(岡山第一病院提供)

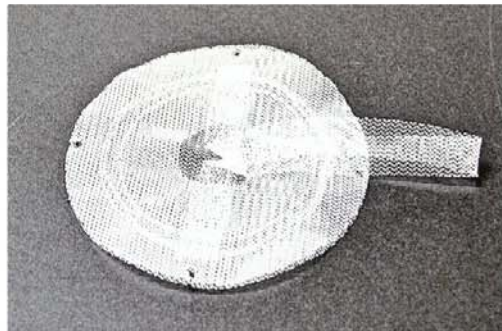


日帰りも実施

壊死の恐れもあり、緊急手術が必要」と江田院長。「鼠径ヘルニアは自然には治らず、治療には手術しかない」と注意を促す。従来の手術は筋膜を縫い縮め、すき間をふさぐ方法。だが、術後の痛みが強く、入院期間が1週間以上かかる。患部が突っ張る感じも残った。

「気軽に受診を」

さらに、重い物を持った際に縫い目が裂けることがあり、再発率は10%と高かった。これに対し、十数年前から広まったのがメッシュ手術。メッシュの形や手術方法が改良され、再発率は今や1%程度に下がった。最も多く使われているプラグ法は、筋膜のすき間に傘状の



ダイレクトクーゲル法の手術で使用
するメッシュ。ストラップは筋
膜との固定に使う

メッシュを入れ、さらに別のメッシュで覆い補強する。一方、江田院長はダイレクトクーゲル法という方法を2005年から採用。鼠径部を4〜5センチ開して、はみ

出た腸を戻した上で、腸を覆う腹膜と筋膜の間に直径7・5〜10センチのメッシュを入れ、すき間をふさぐ。「理論的にはメッシュが腹圧でより強く固定され、広い範囲をカバーできるため再発しにくい」という。手術時間は40〜50分程度。江田院長は硬膜外や静脈、局所麻酔を組み合わせ、術後に麻酔がすぐさめるようにしている。ほか、手術方法や痛み止めの投薬を工夫することで痛みを抑え、日帰りか、1、2泊の短期入院手術を7年から行っている。過去2年半の100例弱の手術のうち、患者の希望で日帰りにしたのは30例余。再発例はないという。出血や感染症などの合併症に注意は必要だが、術後2〜3時間で歩いたり、食事も可能。その後は個人差があるものの、普通は1〜2週間で散歩や軽い運動、庭いじりなどの日常生活やデスクワークに戻る。治療費は日帰りか1、2泊により、3割の患者負担分が5万〜7万円。江田院長は「ヘルニアに悩んでいる人は多い。患者の体の負担が軽く、仕事を休む期間も短い手術が広まっており、気軽に受診してほしい」と呼び掛けている。

さめるようにしている。ほか、手術方法や痛み止めの投薬を工夫することで痛みを抑え、日帰りか、1、2泊の短期入院手術を7年から行っている。過去2年半の100例弱の手術のうち、患者の希望で日帰りにしたのは30例余。再発例はないという。出血や感染症などの合併症に注意は必要だが、術後2〜3時間で歩いたり、食事も可能。その後は個人差があるものの、普通は1〜2週間で散歩や軽い運動、庭いじりなどの日常生活やデスクワークに戻る。治療費は日帰りか1、2泊により、3割の患者負担分が5万〜7万円。江田院長は「ヘルニアに悩んでいる人は多い。患者の体の負担が軽く、仕事を休む期間も短い手術が広まっており、気軽に受診してほしい」と呼び掛けている。